

パパ・ママ子育て知恵袋

第54回は「おばちゃん」

彼女は子供の頃のことを思い出すと、そこには必ず近所に住んでいたおばちゃんの顔が浮かぶのだそうです。

彼女は、母一人子一人の家庭で育ちました。お母さんは朝から晩まで働いて、彼女を高校まで進学させてくれました。そして、ある日、ふっと彼女の前から消えました。なんとなく（男の人と出て行ったんだな）と思いました。

不思議なことに、彼女は、自分の母親の顔をはっきり思い出せないそうです。小さな頃に、どこか見知らぬ場所で撮った親子の写真が一枚ありますが、ピントがぼやけていて、（この人がお母さん）という実感がないそうです。

彼女は続けて、こう話してくれました。

「先生、私は自分が不幸な子供時代を送ったとは思いません。こうやって大人になれたのも、母が一生懸命働いてくれたから。それは事実だもの。

でもね、朝ごはんと一緒に食べた覚えがないの。髪の毛を梳かしてもらった記憶がないの。『いってらっしゃい』『おかえり』って言われたことがないの。お友達みたいに毎日違う洋服を着て学校に行きたいなって思った。小学校のときの担任の先生から『お風呂に入ってる？』って聞かれて、恥ずかしかった。

ホントに母を恨んではいないし、ホントに不幸だったとは思わないんです。不幸じゃなかったけれど、さみしかった。

今は友達にも恵まれて、仕事も楽しいです。特別幸せでもないけれど、笑顔で暮らしてる。あ、そうそう、子供の頃のことを思い出すと必ず近所のおばちゃんのことともセットで思い出すんです。いっつも私が学校に行くときに『いってらっしゃい』、帰りも『おかえり』って声をかけてくれました。『今日は暑いね』とか『傘もってきた？』とか。中学校卒業まで……。

あれ？ やだ、涙が出てきちゃった……」

人が他人を信頼する心を失わずに、社会に絶望せずに生きていくには、こんなささやかなつながりがあれば よいのかも知れません。

あなたは独りではありません。

私たちは子供たちに、そう言い続けたい。